

経済学界の風雲児 使命に邁進

リカルド・ハウスマン氏は、生涯をかけて
経済発展の原動力を解き明かそうとしてきた。

その横顔を、本誌編集長の
カミラ・ルンド・アンダーソンが紹介する。



リカルド・ハウスマン氏は、政府、学界、国際金融機関で40年近いキャリアを積んできており、自身の職業人生を通じて、何が国家の成功と失敗を分けるのかを突き止めようとしてきた。彼は、ボードゲームの「スクラブル」になぞらえて経済発展を語るのを好む。現在、彼はハーバード大学ケネディ行政大学院で教鞭をとっているが、学内の日当たりの良いオフィスで「経済の発展過程は、アルファベットを集めて、その組み合せから新しく作れる単語を見つけるのと同じ手順なんですよ。そう、経済発展はそれに尽きます」と語った。

様々な経験がハウスマン氏の職業人生を彩ってきたが、経済発展の原動力を探り当てたいという情熱はずつと一貫していると彼は語る。「これまでキャリアチェンジをしたと思ったことはありません。ずっと同じスポーツを色々なポジションからプレーし続けてきたように感じています」

「制約要因」を克服する

ハウスマン氏は2000年にハーバード大学で経済開発の実践を教える教授となり、2005年からは同大学の国際開発センター(CID)所長を兼任している。ハーバード大学に移ってからは、経済発展とその制約要因、つまり国家が経済を発展させる上で直面する最大の障害のことだが、その2つの考察に磨きをかけた。世界各国の政府と直接連携し、新たな成長の源泉を見つけ出せるよう支援している。

「上手くいくビジネスモデルを見つけられず八方塞がりになっている人ばかりで、それが本当に嫌でした」とハウスマン氏は説明する。「私が知っている国々は、その大半が歴史を通じて1つの産業に縛られてしまっています。コーヒーであれ、カカオであれ、石油であれ、観光であれ、ある産業が偶然に国内で興って、そうした国々の姿を大きく変えてきました」

こうした選択が行われてきた力学を理解するため、ハウスマン教授は2005年にハーバード大学の同僚エコノミストであるダニ・ロドリック、アンドレス・ベラスコ両教授とともに経済発展の「診断」法を開発した。この主な背景には、各国それぞれに異なる制約が課されているかもしれない、そうした制約を解釈し対応していくことが必要だという考えがあった。「リカルドは中心人物の1人として、経済発展を分析するこの手法の開発に率先して取り組んでいました。このアプローチでは、実用的な政策ツールと芸術性が見事に合体していくのです」とハウスマン教授の同僚で、ケネディ行政大学院で国際開発学を教えるラント・プリチャット教授は語る。

経済発展を「診断」しようとするこの取り組みは、何年も前にベネズエラで始まった対話の結果として始ま

った。ロドリック教授は「私がリカルドに初めて会ったのは、1980年代半ばのことでした。ベネズエラのカラカスで対外債務に関するカンファレンスが開催されており、そこで出会ったのです」と話す。「リカルドは私を長い散歩に連れ出して、カラカスの街を歩いている間ずっと、話を止めませんでした。経済から社会制度、開発について、そして誰もが誤解しきっていることについてまで、彼の話は及びました。この人は何を考えているのだろう、と思ったことを覚えています。彼が何か重要なことに感づいているのだと理解するまで時間がかかりました。その後、リカルドは何年も私に語り続けて、私はそこから相当な恩恵を受けました。彼は政策当局者の実務能力を持っている一方で、学者の壮大なアイディアを追求する姿勢も兼ね備えており、経済学会には類を見ない独自の存在です。彼をケネディ行政大学院に引き入れたことが私の最大の功績のひとつでしょう」

実際、この経済発展の診断法は、ハウスマン教授が常日頃どのように経済学に取り組んでいるかを示す良い見本である。教授は、経済学が現実に照らしてどうかを検証するために、常に理論の壁を越えようとする。プリチャット教授は「リカルドは実体経済と政策立案のドタバタにずっと関わってきていますが、そうした関わりを持つことで彼が注意散漫になることはありませんでした。むしろ、彼はそこから経済学に関する深い知見を新たに得てきました」と話す。また、「リカルドは、思想の右か左かを問わず、ドグマが人を迷わせるような場合でも、経済の真実を追い求める才能を持っています」とも付け加えた。

ハウスマン教授は、問題分析の新手法を探るためであれば学問分野を越えることを厭わない。一方で、通説に無批判な態度や知的好奇心の欠如に対しては寛容ではない。「良い経済学とは、問題を理解し、自らのものとして取り組もうとする姿勢によって進んでいくと思っています」と彼は話す。「学問としての経済学は、釘を探しているのに金槌を作り出していることが多いのです」

ハウスマン教授はキャリアを通し、難問に対する答えを探すために、分野の境界線を越え、様々なアプローチを試してきている。元教え子で、CIDではフェローとして活動し、現在はトルコ財務省に勤務するドウェイギュ・グーベン氏は「マクロ経済学、ミクロ経済学、計量経済学、金融学、社会学、歴史学、哲学、心理学、物理学、そしてフラクタル幾何学に至るまで、ハウスマン教授は様々なツールを用います。これら異なる分野を組み合わせ、とても優雅に融合させて、独自の分析枠組を構築しているのです」と説明した。

違いを生みだす

ハウスマン教授の探求心のルーツは、ベネズエラに見出すことができる。ホロコーストを生き延びた彼の両親は、ドイツとベルギーを離れて、ベネズエラに移り住んだ。2人は革製のハンドバッグを作つて生計を立てていたが、1990年代に縫製産業が人件費の安い国を求めてベネズエラから撤退すると、次のような疑問が頭をもたげた。「バッグ工場を売った後、何をしたら良いのだろう。私たちがわかるのはバッグのことだけなのに」

両親が陥ったジレンマを契機に、ハウスマン氏は人的資本が経済発展に果たす役割について考えを巡らせるようになった。「私が研究したのは、経済発展が実は、人々がさらに多様な生産能力をどんどん習得し、そうした生産能力を組み合わせたり、組み替えたりする流れなのではないか」という考えでした」と彼は語っている。人的資本が経済発展に果たす役割の探求が、ハウスマン氏が研究を続ける上での原動力となった。

ハウスマン氏の最初の学位は、コーネル大学で取得した工学と応用物理学の学士号であった。しかし同氏は物理学と工学を捨てて社会科学の道を選んだ。「ベネズエラで電子の研究をすることは、ベネズエラ経済を学ぶことほど魅力的ではありませんでした。電子は世界のどこでも同じですが、経済はそうではないですから」と同氏は話す。

同じくコーネル大学で経済学の修士号と博士号を取得後、ハウスマン氏はベネズエラに帰国して経済学を教え始めた。1984年、彼は様々な政府省庁に助言を行うようになり、1992年には調整企画省の大臣に任命されるとともに、ベネズエラ中央銀行の理事会の一員も務めた。1994年、同氏はワシントンDCに向かい、米州開発銀行で初のチーフエコノミストとなった。

「原罪」と「暗黒物質」

チーフエコノミストを務めた6年の間も、ハウスマン氏は引き続き、ベネズエラで起こった出来事について思いを巡らせていた。ラテンアメリカでは、多くの国々がベネズエラ同様の経験をしていた。なぜ経済は慢性的なボラティリティに苦しんでいるのか。マイケル・ギャビン、アーネスト・タルビ、ロベルト・ペロッティの各氏と協力しながら、ハウスマン氏は財政政策が常に景気循環増幅的になる原因を研究した。財政政策は経済循環を安定させる代わりに、景気後退を深刻化させ、ブームを加熱させていたからだ。景気循環増幅的な財政政策に関する研究を行つた結果、ハウスマン氏と研究協力者たちは「一部の国では借り入れ能力も景気循環的であるため、財政政策も景気循環増幅的になっている」との結論に至つた。こうした国は経済が好調な時は資本市場にアクセスして借り入れできるが、不況時には借り入れが不可能なのだ。

ハウスマン氏とバリー・アイケングリーン氏は、ある国が自国通貨ではなく、ドルなどの外貨でしか海外で借り入れができない状況を説明するために「原罪」という言葉を生み出した。発展途上国が経済発展と成長を刺激しようとする場合のように、「原罪」に苦しむ国で対外債務が膨らめば、バランスシート上で通貨のミスマッチが発生する。そのため、自国通貨が価値を失えば、債務は返済時にいつそう高額となり、しばしば債務不履行を引き起す。

ハウスマン教授の原罪理論に対し、カルメン・ラインハートとケネス・ロゴフのエコノミスト2人が異議を唱えた。両エコノミストは債務問題の原因を通貨のミスマッチに求めるのではなく、先進国であれば通常は容易に管理できる債務水準に対応できない「債務アレルギー」に新興国経済は苦しんでいると論じた。こうした考え方は、一部の国が何度も繰り返し債務不履行に陥る理由を説明しているとした。

過去に学んだ物理学からひらめきを得て、ハウスマン教授は国際金融統計のパズルを解き明かすために「暗黒物質」という人目を引く表現を考案した。世界最大の債務国であるアメリカは、いかにして債務の金利返済を上回る金額を海外資産から得ているのか。ハウスマン教授と、現アルゼンチン中央銀行総裁のフェデリコ・ストゥルゼネッゲル氏は2005年に「アメリカと世界の不均衡—暗黒物質はビッグバンを防ぐことができるか (US and Global Imbalances: Can Dark Matter Prevent a Big Bang?)」を発表した。この論文で2人は「暗黒物質」を用い、外国直接投資や他の輸出されたノウハウといった目に見えない資産について説明した。こうした形のない資産によって、アメリカは外国債権者に支払う金利を相殺するのに十分な収入を生み出しているのだ。物理学では、暗黒物質はそれが発する引力によってのみ観測可能である。国際金融統計においては、暗黒物質の存在はそれが生み出す収入によってのみ推定可能となる。

「原罪」と同様、「暗黒物質」仮説は激しい論争を巻き起こし、議論は今日まで続いている。

ワシントンからボストンへ

米州開発銀行での在職期間中、ハウスマン氏はいわゆるワシントン・コンセンサスの定式化にも参画していた。ワシントン・コンセンサスとは、経済政策の10項目を規定したもので、危機に見舞われた経済を改革する処方箋の雛形となつたが、以後、広く批判されてきたものだ。ハウスマン氏はエコノミストのジョン・ウイリアムソン氏がワシントン・コンセンサスについて初めて説明したセミナーに出席し、同氏がまとめた書籍のラテンアメリカに関する章の著者となつた。「ワシントン・コンセンサスはある意味で、極めてラテンアメリカに独特な一連の不均衡に関するラテンアメリカ・コンセンサスでした」とハウスマン氏は説明している。

しかし、時が経つにつれ、経済理論が予測した結果をこうした政策がもたらしているか、ハウスマン氏は疑問を深めていった。改革を実施した国々が、実施しなかった国々よりも幾分か改善したという意味で、一定の正の相関はあった。しかし1990年代後半には、アジアとロシアの金融危機がラテンアメリカに波及し、結果として1998年から2002年にかけて成長が後退した。

「これが理由で私は再考を余儀なくされました。私が当初に考えていた以上に、経済成長には多くの要因があるのかもしれませんのです」とハウスマン氏は言う。「発展を阻害している別の要素にはばったり出くわしました。私たちはそれまで考えもしなかった内容だったのです。そして、この発見は私がハーバードに移るのと時期が重なったのです」

ハウスマン氏は答えを求めて再び研究に取り組み、「経済複雑性」という概念に行き着いた。この概念はサイエンス誌の2007年7月に掲載された論文で初めて提唱された。IMF調査局のクリス・パパジョルジュに

こうした一連の成果は、今では広く経済分析に用いられ、政策助言の際の情報源となっている。多くの国々が直接、CIDから力を借りている。例えば、アルバニアやメキシコ、パナマ、スリランカの政府だ。

究極の皮肉は、開発研究の第一人者となったハウスマン教授の母国ベネズエラが過去数十年で最悪の景気後退とハイパーインフレに苦しんでいることかもしれない。

ハウスマン氏は母国の現状について歯に衣を着せずに語る。「ベネズエラの壊滅的な景気後退に言い訳の余地はありません。何の役にも立たないと世界中の誰の目にも明らかだった政策を採用した結果なのです。それが複数為替レートであれ、財政規律の欠如であれ、資産収用であれ、財産権を巡る不確実性であれ、手ぬるい金融政策であれ、物価統制であれ、こうした政策が社会を破壊することは言うまでもありません」

同氏の遠慮ない批判を理由に、ベネズエラ政府はハウスマン氏が国内で歓迎されることはないと言った。

「ハウスマン教授には経済の真実を追い求める才能がある。

左右の思想が人を迷わせるような時でも

よれば、多くのエコノミストは複雑性の概念が同氏による開発経済学への最も重要な貢献だと考えている。

ハウスマン氏は自身のウェブサイトで「複雑なものを生み出す秘訣は賢い人々を集めることではありません。それぞれ異なる、他を補い合うノウハウを持ち寄れる人々を多く集めることなのです。より豊かな社会は、社会全体としてノウハウが豊かで、こうした知見を活用して、より多様でより複雑な製品を作り出せます」と言っている。その一方で、彼曰く貧しい国は「単純な製品をいくつか」作るのだ。

ハウスマン教授はハーバード大学の優れた資源を利用し、物理学や経済学、公共政策といった自身の学問的知見に基づく学際的なアプローチや、ネットワークやコンピューター科学の専門知識を活かして、社会が生産ノウハウを蓄積するための道筋を示そうと試みた。この研究成果は2011年に出版された『経済複雑性アトラス—繁栄への道筋を示す (The Atlas of Economic Complexity—Mapping Paths to Prosperity)』にまとめられ、この本の中で各国の生産ノウハウの量を測定しようと試みている。

これはまだ始まりに過ぎなかった。現在、CIDグローバルラボの取り組みの中心は、こうしたノウハウの複雑なネットワークのマッピングである。2011年にはリサーチフェロー2名だったグローバルラボのスタッフは2017年までに40名へと拡大した。チームには、数学者や物理学者、経済学者、高度な視覚表現を専門とするプログラマー、IT専門家、アトラスの様々なウェブサイトの管理と開発を支援する広報担当者が参加している。

うした反応があつても、ハウスマン氏は臆することなく母国関連の議論に参加しているし、同国を経済回復の軌道に乗せることを焦点とした研究も計画している。

パフォーマーとしての遺伝子

ハウスマン教授が魔法を發揮するのは、CIDでの研究環境だけにとどまらず、教室でもその力を振るう。優れた教師が誰でもそうであるように、彼は生来の役者である。一見したところ、彼の子どもたち3人はそれぞれ父親とは大きく異なる道を選んだようである。1人は芸能人、もう1人は脚本家、3人目はコメディアンである。しかし、4人には共通項がある。それは演じる才能である。

博士課程に在籍し、CIDのリサーチ・フェローであるセバスチャン・ブーストスは、役者が受けるべき最大限の称賛を教え子たちがハウスマン教授にどう示しているかを語ってくれた。それは拍手である。「すべてが終わりを迎える学期末が近づくにつれ、学生たちは学期中に議論した内容を全て理解し始め、教授の授業は大抵、学生みんなの拍手で幕を閉じます。みんなの顔が喜びで輝くのです」

「ハウスマン氏が次に向かう先はどこだろう」とパパジョルジュは思いを馳せている。「この業界でハウスマン教授が特別なのは、教授とCIDのチームが次に何を考えつくのか、人々が心待ちにしていることでしょう」**FD**

カミラ・ルンド・アンダーソンはファイナンス&ディベロップメント編集長。